参考文献

石井庄司『古典考究　記紀篇』（第一書房、昭和一九年）

井手　至「萬葉語イハバシル・ハシリヰ・ハシリデ」（「萬葉」第三十二号、昭和三四年）

井手　至「掛け詞」（「月刊文法」第一巻第四号、昭和四四年）

井手　至「万葉集変体漢文表記諸巻における仮名書き語彙の表記法について」（「国語国文」第三十八巻第十号、昭和四四年）

井手　至「掛け詞の源流」（「人文研究」第二十一巻第六分冊、昭和四五年）

井手　至「万葉集文学語の性格」（『萬葉集研究　第四集』塙書房、昭和五〇年）

伊藤　博『萬葉集の表現と方法　下　古代和歌史研究6』（塙書房、昭和五一年）

稲岡耕二「万葉集に於ける音仮名表記普通名詞に就いて―序説として、巻一巻二の場合―」（「美夫君志」第十号、昭和四一年）

稲岡耕二『萬葉表記論』（塙書房、昭和五一年）

乾　善彦「国訓成立のある場合―偏旁添加字をめぐって―」（「国語学」第159集、平成元年）

乾　善彦「仙覚『万葉集註釈』の文字意識」（「帝塚山学院大学日本文学研究」第21号、

平成二年）
上田秋成『萬葉集会説』（寛政六年（一七九四））
内田賢徳「動詞重複形態の述語」（「帝塚山学院大学日本文学研究」第11号、昭和五五年）
内田賢徳「孝徳紀挽歌二首の構成と発想―痕信詩との関連を中心に―」（「萬葉」第百三十八号、平成三年）
内田賢徳「萬葉しぐれ考」（「ことばとことのは」第10集、平成五年）
内田賢徳「巻十六　桜児・縵児の歌―主題と方法―」（『萬葉集研究　第二十集』、平成六年）
内田賢徳「漢字表現の応用と内化」（『萬葉集研究　第二十一集』、平成九年）
榎本福寿「日本書紀の敬語―「奉」をめぐって―」（「佛教大学研究紀要」通巻第六十八号、昭和五九年）
岡井慎吾『玉篇の研究』（東洋文庫、昭和八年）
澤瀉久孝「萬葉集―文字使用及び訓み方―」（「国語国文の研究」第四号、昭和二年）
澤瀉久孝「古事記天孫降臨の條訓詁復古」（「国語国文」第十巻第一号、昭和一五年）
澤瀉久孝『萬葉古徑　三』（日本書院、昭和二八年。中公文庫、昭和五四年）
春日政治『西大寺本　金光明最勝王経古点の国語学的研究』（岩波書店、昭和一八年）
亀井　孝　“Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese”（吉川弘文館、昭和二九年）
亀井　孝「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題―」（『古

事記大成（第三巻）言語文字篇』平凡社、昭和三二年）
川端善明「万葉仮名の成立と展相」（『日本古代文化の探求　文字』社会思想社、昭和五〇年）
岸田武夫『国語音韻変化の研究』（武蔵野書院、昭和五九年）
倉野憲司『古典探究』（積慶園、昭和二七年）
古賀精一「古事記における会話引用―白、奏、詔、告の用字法―」（『古事記年報（2）』、昭和三〇年）
小島憲之『上代日本文学と中国文学　中』（塙書房、昭和三九年）
小島憲之「萬葉集用字考証実例（一）～（四）」（『萬葉集研究』第二～第四集、第七集、塙書房、昭和四八、四九、五〇、五三年）
小林芳規「上代における書記用漢字の訓の体系」（「国語と国文学」第四十七巻第十号、昭和四五年）
小林芳規「古事記の用字法と訓読の方法―訓注よりの考察―」（「文学」第三十九巻第十一号、昭和四六年）
小林芳規「平城宮木簡の漢字用法と古事記の用字法」（『石井庄司博士喜寿記念論集　上代文学考究』塙書房　昭和五三年）
小林芳規「古事記音訓表（上）（下）」（「文学」第四十七巻第八号、第十一号、昭和五四年）

小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』（東京大学出版会、昭和五九年）
小松英雄『国語史学基礎論』（笠間書院、昭和四十八年初版、平成六年新装版）
小松英雄『日本語書記史原論』（笠間書院、平成一〇年）
近藤義郎・渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」（『日本の考古学Ⅵ　歴史時代（上）』河出書房新社、昭和四二年）
近藤義郎『土器製塩の研究』（青木書店、昭和五九年）
佐伯梅友『萬葉語研究』（有朋堂、昭和三八年）
佐佐木隆「『万葉集』のうたの文字化」（「文学」第四十四巻第五号、昭和五一年）
佐佐木隆「『万葉集』における歌意と文字との交渉―（後者相宿友）をめぐって―」、「国語学」第百十一集、昭和五二年）
佐竹昭広「蛇賀入の源流―「綜麻形」解読に関して―」（「国語国文」第二十三巻第九号、昭和二九年）
品田太吉「萬葉集雑話」（『短歌講座　第九巻』改造社、昭和七年）
春　登『萬葉用字格』（文化一五年（一八一八））
白藤礼幸「字訓研究の一試論」（『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』明治書院、昭和五二年）
高木市之助『吉野の鮎』（岩波書店、昭和一六年）
武田祐吉「古事記の訓仮名に就て」（『橋本博士還暦記念　国語学論集』岩波書店、昭和一

九年）
築島　裕「万葉集の動詞の語尾表記について」（『萬葉集研究　第十二集』、昭和五九年）
土橋　寛『日本古代の呪禱と説話　土橋寛論文集　下』（塙書房、平成元年）
東野治之『長屋王家木簡の研究』（塙書房、平成八年）
中西宇一「発生と完了―「ぬ」と「つ」―」（「国語国文」第二十六巻第八号、昭和三二年）
西宮一民『古事記の研究』（おうふう、平成五年）
野村剛史「上代語のツとヌについて」（「国語学」第百五十八集、平成元年）
橋本四郎「巻十六「饌具雑器」をめぐつて」（「萬葉」第二号、昭和二七年）
橋本四郎「動詞の重複形」（「国語国文」第二十八巻第八号、昭和三四年）
蜂矢宣朗「萬葉集における活用語尾の表記―動詞の部―」（「山辺道」第六号、昭和三五年）
蜂矢宣朗「仮名表記と読添へ」（「萬葉」第四十三号、昭和三七年）
蜂矢真郷『国語重複語の語構成論的研究』（塙書房、平成一〇年）
福田良輔『古代語文ノート』（南雲堂桜楓社、昭和三九年）
馬渕和夫「玉篇佚文補正」（「東京文理科大学国語国文学会紀要」三号、昭和二七年）
宮地敦子『身心語彙の史的研究』（明治書院、昭和五四年）
武智雅一「萬葉集に於ける聯想的用字」（「文学」第一巻第八号、昭和八年）
毛利正守「萬葉集ヤ・ワ行音を含む字余り」（『小島憲之博士古稀記念論文集　古典学藻』塙書房、昭和五七年）

毛利正守「上代日本語の音韻変化―母音を中心に―」（「国語国文」第五十七巻第四号、昭和六三年）
毛利正守「文字による文学」（中西進編『日本古代文学新史　古代Ⅰ』至文堂、平成二年）
毛利正守「母音変化と字訓借用」（『鶴久教授退官記念　国語学論集』桜楓社、平成五年）
森重　敏『上代特殊仮名音義』（和泉書院、昭和五九年）
森本健吉「萬葉集用字概説」（『萬葉集講座　第三巻　言語研究篇』（春陽堂、昭和八年）
森本治吉「萬葉集の研究―用字法を中心として―」（『岩波講座　日本文学』岩波書店、昭和七年）
柳田征司『室町時代語を通して見た　日本語音韻史』（武蔵野書院、平成五年）
山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂、昭和六〇年）
山口佳紀『古事記の表記と訓読』（有精堂、平成七年）
山崎福之「万葉集における漢語と表記―文字表現をめぐって―」（『和漢比較文学叢書第九巻　万葉集と漢文学』（汲古書院、平成五年）
山田孝雄『奈良朝文法史』（宝文館、大正二年）
横山　英「古事記の「恐」と「畏」」（「文学」第九巻第十二号、昭和一六年）
吉井　健「万葉集における母音脱落を想定した表記」（「萬葉」第百五十二号、平成六年）
吉澤義則「萬葉集に於ける文字の文学的用法に就て」（「国語国文」第三巻第一号、昭和八年）

吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』（明治書院、昭和四八年）
渡辺則文「藻塩から塩浜へ―上代塩業史の一齣―」（「ヒストリア」第三号、昭和二七年）